

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00729

研究課題名(和文)ロシア帝国末期におけるナショナリズムと帝国統治構造の変容：西部境界地域を事例に

研究課題名(英文)Emerging Nationalisms and Transformation of the Ruling System in Late Imperial Russia: In the Case of the Western Borderlands

研究代表者

青島 陽子 (Aoshima, Yoko)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授

研究者番号：20451388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果の主要なものは、2018年・2019年の国際シンポジウム(ヴィルニウス)、2019年第10回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会(東京)、2019年スラブ・東欧ユーラシア研究会(ASEEES)(サンフランシスコ)、2021年第10回国際中欧・東欧研究協議会(ICCEES)(オンライン)、2020年・2022年ロシア史研究会大会での研究報告(オンライン・東京)での研究成果報告である。これらの研究活動を通じて、20世紀初頭、ロシア帝国が国制改革を進めるなか、西部境界地域で高まる民族・社会的衝突に対して、明確な民族政策を提示できず、対応に苦慮する様子を具体的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、20世紀初頭の国制改革の時期において、辺境地域における諸民族のナショナリズムとロシア・ナショナリズム、多様な社会問題の諸相と、それに対するロシア帝国側の対応を地域ごとに具体的に明らかにしたことである。本研究の成果は、諸ナショナル・ヒストリーに分離し、あまり研究が進んでいなかった、境界地域における旧体制と諸民族の関係を明らかにしたことにある。このことで革命・戦争・内戦・ソ連建國と崩壊につながる、ロシア権力と境界地域の諸民族との複雑な関係性に関する知見を得た。ひいては、現代のロシア西方の境界地域における諸集団の対立と協力の諸関係を理解することにもつながるだろう。

研究成果の概要(英文)：The main results of this research project are international symposiums in Vilnius in 2018 and 2019 and panels organized at the 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies in 2019(Tokyo), the Association for Slavic and East European Studies of Eurasia (ASEEES) in 2019 (San Francisco), the 10th International Conference on Central and East European Studies (ICCEES) in 2021(online) and at the 2020 and 2022 Congresses of the Society for the Study of Russian History(online and Tokyo). Through these research activities, we have clarified how the Russian Empire was becoming puzzled and confused to cope with growing national and social conflicts, including intensified Russian nationalism, in the early 20th century in the western border regions of the Russian Empire as it proceeded with its reform of the state system.

研究分野：中東欧ロシア近現代史

キーワード：帝国 ナショナリズム ロシア 中東欧 近現代史

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の「問い」は、帝政末期に伝統的なロシア帝国の統治体制が民族原理によってどの程度変容を迫られたのか、あるいはどの程度耐久性を示したのか、である。この問題を分析するために、ナショナリズムが先行して先鋭化した西部境界地域を手掛かりとすることとした。

多民族を包摂するロシア帝国は、伝統的に諸民族のエリートや宗教組織を媒介しながら統治を行った。しかし、帝政末期になると、こうした帝国の統治体制内部には、諸民族のナショナリズムとともに、ロシア・ナショナリズムも伸長し、体制はこうした諸ナショナリズムに対して対応を迫られることになった。帝国ロシアの跡地に勃興した新国家ソ連が、民族を単位とする連邦制を採用したことを想起すれば、帝国統治のなかで次第に民族原理が拡張するプロセス、それに対する当局の対応の変化を明らかにすることは、極めて重要な意味を持つ。従来は、帝国と諸民族の対立と協力という二元的関係に光が当てられたが、本研究は、伝統的帝国イデオロギー、諸民族のナショナリズム、ロシア・ナショナリズムが実際の帝国統治のなかでどう相互に影響したか、また、それらが帝政末期の統治体制の変容にどう作用したかを具体的に解明することを目指した。

本研究を構想する契機となったのは、2017年度(2018年2月10/11日)末に東京大学で行われたシンポジウム「Protecting the Empire: Imperial Government and Russian Nationalist Alliance in the Western Borderlands during the Late Imperial Period」であった。この国際シンポジウムは本研究の研究代表者がリトアニア歴史研究所と共同で組織し、そこに本研究の研究分担者4名が参加した。シンポジウムの中心的なトピックは、ロシア帝国の末期に西部境界地域においてロシア・ナショナリズムがどのように強化され、ロシア帝国政府がそれに対してどう対応したのか、という点を、西部境界地域の諸民族との関係を踏まえながら検討するものであった。本研究はこのシンポジウムでの討論に触発され、さらに研究を深化させるために組織された。

このシンポジウムが企画されるまでには、それまでの研究蓄積があった。2016年8月21/22日に、リトアニア歴史研究所との共催で研究代表者が組織した国際シンポジウム「Entangled interactions between religions and national identities in the space of the former Polish-Lithuanian Commonwealth」(科学研究費補助金(2015年度基盤研究C)「近代ロシア・ナショナリズムの形成—ロシア帝国西部地域諸民族との相互関係のなかで」)において、19世紀のヨーロッパ東部境界地域における諸民族の相互影響関係を、宗教とナショナリズムをテーマとして議論した。ここには8カ国から15名の参加者があった。シンポジウム終了後、共同企画者のDarius Staliūnas、Olga Mastianica、福岡千穂で意見交換会を開いた。その話し合いの中で、19世紀における帝國的統治構造と民族問題の研究は比較的進んでいるが、20世紀初頭の研究はまだ不十分だとの意見が出された。そこで、リトアニア・チームが上述の2015年度基盤研究Cとの共同という形式で、研究プロジェクト「Divergence through Convergence: Interactions between Imperialism and Nationalisms on the Western Borderlands of the Russian Empire [contract No S-LJB-17-3]」を申請し、Lietuvos mokslo taryba (Research Council of Lithuania)から助成金を得た。このリトアニア側のファンドと2015年度基盤研究Cを中心に開催されたのが上述の2018年のシンポジウムである。

このシンポジウムでの議論を踏まえ、分担者らが研究成果を出版するために研究を深化させることが大きな課題となった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ロシア帝国がその末期において、ロシア・ナショナリズムを含む、諸ナショナリズムの挑戦に対してどう対応し、帝国の統治体制がどう変容したのかを明らかにすることである。特に、ナショナリズムが先行して発展したロシア帝国の西部境界地域(現在のバルト諸国、ベラルーシ、ウクライナ、ポーランド)に焦点を合わせ、具体的な事例を検証することを目指した。従来の研究が、帝国と独立・自治を目指す民族運動の二元的関係に着目してきたのに対し、本研究は、ロシア帝国が、ロシア・ナショナリズムを含む諸民族ナショナリズムの挑戦にどのように対応し、どのように帝國的統治構造を変容させたのかに光をあてる。この問いの解明は、その後継国家であるソ連、現代ロシア連邦の帝國的な編成や統治意識、その内部でのロシア・ナショナリズムの役割、周辺諸国家のナショナリズムとの関係など、中東欧・ロシア近現代史に新しい研究の観点をもたらすこと期待される。

## 3. 研究の方法

●具体的な研究対象は、1905年革命/1906年立憲体制成立前後を対象に、①西部境界地域のナショナリズムの伸長、②帝国中央部および各民族地域におけるロシア・ナショナリズムの伸長、③①②が帝国統治やそのイデオロギーに与えた影響である。

●研究遂行のための体制は、以下である。各民族地域の専門家に研究分担者として参加してもらい、地域ごとに分析を進める。

- \*代表者—青島陽子 全体の統括、ロシア帝国イデオロギーや統治政策を分析する。
  - ・分担者—梶さやか ポーランド王国、リトアニア、ベラルーシなどの北西部諸県における諸民族のナショナリズム、ロシア・ナショナリズム、帝国政府の関係を分析する。
  - ・分担者—小森宏美 エストニア、ラトヴィアなどのバルト諸国における諸民族のナショナリズム、ロシア・ナショナリズム、帝国政府の関係を分析する。
  - ・分担者—松里公孝 ウクライナなどの南西部諸県における諸民族のナショナリズム、ロシア・ナショナリズム、帝国政府の関係を分析する。
  - ・分担者—福島千穂 西部境界地域における宗教集団や宗教政策、ロシア・ナショナリズム、帝国政府の関係を分析する。
- \*梶さやか、福島千穂は2015年度基盤研究Cの研究分担者でもあった。  
\*2015年度基盤研究C以来のリトアニア歴史学研究所19世紀部門の歴史家との共同研究を継続し、適宜、本研究課題への協力・助言を依頼した。具体的には、19世紀部門のリーダーであるDarius Staliūnas、2015年度基盤研究Cで海外共同研究者であったOlga Mastianica、さらに2018年シンポジウムで参加するVilma Žaltauskaitė、Vytautas Petronisらである。

●研究の内容に関しては、特に以下の点に着目する。

- ① 従来、帝国イデオロギーとロシア・ナショナリズムを明確に区別せずに論じてきたが、両者を峻別し、相互の影響関係を検討する。
- ② ロシア人も含めて、諸民族集団の存在やその境界を前提して、それら民族相互、帝国体制との対立や協力を問うのではなく、それぞれを帝国統治体制のなかの可変的な構成要素として変動のダイナミズムを分析し、それに伴う帝国統治構造の変容を解析する。
- ③ 思想や理念というより、実際の政治・社会的プロセスに着目する。とくに、1905年革命／1906年立憲体制成立前後に焦点を当て、民族問題がこうした体制の改革に与えた影響、また逆に、体制の改革が民族問題に与えた影響を検討する。
- ④ 宗教ファクターにも焦点を当てることで、伝統的な帝国統治がどう変容したのかを別の角度からも検証する。特に宗教と帝国統治との旧来の結びつきのみならず、ロシア・ナショナリズム、諸民族のナショナリズムなどの近代的な諸力との連関も分析する。

#### 4. 研究成果

●国際的な対話・議論・研究発表

本研究の初年度である2018年度には、2018年2月に行われた国際シンポジウムを継承する形でスムーズに研究活動を始めることができた。特に、2018年度は、ロシア語での研究上の対話を重視し、2018年2月の国際シンポで招聘できなかった、研究対象の主要国であるベラルーシとロシアの研究者との対話を深めた。2018年5月には、研究代表者が、ロシアの科学アカデミーペテルブルク支部開催の国際シンポジウムに参加し、20世紀初頭のロシア帝国の民族政策に関する報告を行った。また、2018年6月には、共同研究を行っているリトアニアの歴史学研究所との共催で、ベラルーシの歴史研究者7名をヴィルニユスの歴史学研究所に引き、ロシア語でロシア帝国の民族政策を検討する国際会議を開催した。前者のロシアでの国際シンポジウムの成果は書籍にまとめられ、研究代表者も論考を寄稿した。これらの研究活動の結果、英語圏での議論に偏っていた研究上の対話をロシア語圏に広げることができた。

2019年6月20-21日には、リトアニア歴史研究所、ドイツ歴史研究所（ワルシャワ）との共催で「Making the Empire Great Again: Challenges in Modernising the Russian Empire」を催した。このシンポジウムには、11カ国から17人が参加し研究報告を行った。この議論の結果、次第に民族問題が深刻化する中で、ロシア帝国の政府やエリートがどのようにロシア帝国を再生させようとしたのかについて議論を深めた。

2019年6月29日には、東京大学で開かれたThe 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studiesで、Darius Staliūnas, Yaroslav Shulatov, Olga Khomenkoを報告者として引き（ディスカッサントは長縄宣博）パネル「Nations in the Russia's Empire: Challenge or Leverage?」を組織した。このパネルでは、極東の専門家も議論に加わってもらったため、西部境界地域のみならず、東部境界地域へも視野が広がり、西部と東部における民族問題の差異や類似性にも気づかされた。

2019年11月22-27日のThe 2019 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Conventionでは、Darius Staliūnas, Bradley Woodworth, Kimitaka Matsuzatoらとともに（ディスカッサントはIlya Gerasimov）パネル「Multiethnicity as a Challenge for Tsarist Government in Late Imperial Period」を組織した。このパネルでは、帝国論に関する学術的な討論の中核的フォーラムの一つである学術雑誌Ab Imperioの主幹であ

る Ilya Gerasimov に意見をもらうことができたことも大きな成果であった。同時に当学会では、Peter Waldron, Yaroslav Shulatov らとともに、ラウンドテーブル「Imperial Challenges: One Century of Transformations in Russia and Japan」も組織した。

2021年には、Covid-19のために延期されていた第10回国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）大会もオンラインで実施され、パネル「The Challenge of Modernization and National Questions in the Western Border Regions during the last decades of the Russian Empire」を組織して Darius Staliūnas, Anton Kotenko とともに国際的に研究報告をすることができた。討論者にはハプスブルク帝国内のウクライナ系住民の研究を行っている Andriy Zayarnyuk を招き、帝国間の比較という議論ができたことは意義深かった。

#### ●国内での研究成果発表

2020年11月のロシア史研究会大会において「共通論題B」で「ロシアとポーランド」で研究代表者と分担者の梶さやかが報告をし、分担者の松里公孝が討論者を務めた。両報告は2022年5月号、11月号で『ロシア史研究』に査読論文として掲載された。また、2022年10月のロシア史研究会大会では、研究代表者と分担者の松里公孝が研究報告をし、分担者の小森宏美が司会を務めた。

#### ●研究成果の出版

2021年には、2018年以来続けてきたリトアニア歴史研究所との共同研究の成果が英文論集として出版された。Darius Staliūnas and Yoko Aoshima, eds., *The Tsar, the Empire, and the Nation: Dilemmas of Nationalization in Russia's Western Borderlands, 1905-1915* (Budapest: Central European University Press, 2021). 本書には、6カ国から12本の論考が収められた。本論集には、研究代表者の他、研究分担者の松里公孝と福嶋千穂が参加した。本論集は、ロシア帝国末期の西部境界地域における帝国、諸民族のナショナリズム、ロシア・ナショナリズムの複雑な関係性が地域ごとに検討された。この論集を通じて、①ロシア帝国が1905年前後に個別の民族集団への差別的政策をやめ、統合を目指す政策に一時的に転換したこと、②さらに、立憲君主制的な体制を採ったことで、民族への差別的な政策がとりにくくなったこと、③しかしながら、統合的政策によっても非ロシア人の忠誠心を確保できないことも明らかとなり、個別民族の隔離や差別などの政策も部分的に取り入れたり、ロシア・ナショナリズムに依拠しようとしたりする試みもなされたこと、④しかし、境界地域における諸民族の差別や隔離、ロシア・ナショナリズムへの依拠は危険であることも認識されたこと、⑤こうした矛盾した方針の間で、帝国エリートは民族政策の明確な戦略を定められなかったことなどを明らかにした。*Slavic Review* などの学術誌で書評が取り上げられ、高い評価を得た。本書は、Knowledge Unlatched (Wileyを親会社とし、ドイツを拠点とするオープンアクセス・プロバイダ)によってオープン・アクセス書籍に選出され、現在フリーでのダウンロードが可能となっている。

また、2015年度基盤研究Cのプロジェクトの一環として開催した2016年8月の国際シンポジウムを基盤とした英文論集もまた、本研究の議論を受けて内容をブラッシュアップし、出版することができた。Yoko Aoshima, ed., *Entangled Interactions between Religion and National Consciousness in Central and Eastern Europe* (Boston, MA: Academic Studies Press, August 2020). 本論集では、中東欧・ロシアのナショナリズムの形成と変化を近世からの連続性の中で捉え、特に各地域で宗教がナショナリズムの特性を形作った点に着目した。本論集には、5カ国から11本の論考が寄せられた。また、研究代表者の他、研究分担者の梶さやかと福嶋千穂が参加した。*Slavic Review*などの学術誌で書評が取り上げられ、高い評価を得た。

本研究は、2018年度2月の国際シンポジウムを契機として構想されていたため、2018年4月から順調に進めることができた。特に、2018年度・2019年度は集中的に多くの国際シンポジウムやセミナー、学会報告を開催し、十分な議論を重ねた。予定されていた論文集の出版は、個々の執筆者の事情からやや遅延が生じたものの、むしろそれによって議論の深化や英語のブラッシュアップが可能となった。結果として、本研究の期間内に二冊の英文論集を出版することができた。他方、2019年度の末に始まったCovid-19の感染拡大、さらには2022年2月に始まったロシアによるウクライナの侵攻によって、資料調査や学会参加などができなくなり、本研究の遂行に遅延が生じた。そのため、代替手段を取りながら、漸く2022年度に本研究を完遂することができた。総合的には十分な成果をあげることができたと言える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Matsuzato Kimitaka	4. 巻 46
2. 論文標題 The Donbas War and politics in cities on the front: Mariupol and Kramatorsk	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Nationalities Papers	6. 最初と最後の頁 1008 ~ 1027
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00905992.2018.1480598	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimitaka Matsuzato	4. 巻 532
2. 論文標題 Dissimilar Politics in Mariupol and Kramatorsk: Two Ukrainian Cities on the Eastern Front	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PONARS Eurasia Policy Memo	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松里公孝	4. 巻 132
2. 論文標題 Gerard Toal著、Near Abroad: Putin, the West, and the Contest over Ukraine and the Caucasus	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国家学会雑誌	6. 最初と最後の頁 319-325
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶さやか	4. 巻 105 1
2. 論文標題 ポーランドとリトアニア、両国民の滅びと再生 一八・一九世紀転換期における分割の衝撃とエリート	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 138-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶さやか	4. 巻 43
2. 論文標題 書評：早坂眞理『リトアニア 歴史的伝統と国民形成の狭間』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東欧史研究	6. 最初と最後の頁 37-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青島陽子	4. 巻 -
2. 論文標題 ウクライナ戦争の歴史的位相	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SRCウェブサイト「SRC研究員の仕事の最前線」	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青島陽子	4. 巻 131-7
2. 論文標題 帝政ロシア史研究における「帝国論的転回」 ロシア帝国西部境界地域を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 60-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青島陽子	4. 巻 108
2. 論文標題 帝政末期ロシア（一九〇四年末 一九一〇年）における国民教育大臣の非ロシア人政策観 西部境界地域を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ロシア史研究	6. 最初と最後の頁 41-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松里公孝	4. 巻 第957号臨時増刊
2. 論文標題 未完の国民、コンテスタブルな国家、ロシア・ウクライナ戦争の背景	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 42-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福島千穂	4. 巻 6
2. 論文標題 書評「Larry Wolff, Disunion within the Union: The Uniate Church and the Partitions of Poland」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フェネストラ 京大西洋史学報	6. 最初と最後の頁 27-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶さやか	4. 巻 109
2. 論文標題 一九世紀後半における一八六三-六四年ポーランド一月蜂起の影響と記憶 ロシア帝国北西部地域を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ロシア史研究	6. 最初と最後の頁 3 30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福島千穂	4. 巻 1033
2. 論文標題 ウクライナとロシア：「元祖」と「本家」の相克	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 61-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計23件(うち招待講演 9件/うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Yoko Aoshima
2. 発表標題 Overlap between Liberal and National Attitudes of Polish people in the Russian Empire
3. 学会等名 Promis Seminar “ Empire and Nations: The Polish, Jewish and Korean Question in the Russian Empire ”
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoko Aoshima
2. 発表標題 Liberal Opposition or National Protest? - The Parents' Committee after 1905
3. 学会等名 International Symposium in Vilnius “ Making the Empire Great Again: Challenges in Modernising the Russian Empire ”
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoko Aoshima
2. 発表標題 Nationality Question in Schools of the Western Borderland around 1905
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoko Aoshima
2. 発表標題 Historical Perspective on Citizenship: In the Case of Russia 's Multi-divided Empires
3. 学会等名 JSPS研究拠点形成事業 Core-to-Core Program, International Seminar (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoko Aoshima
2. 発表標題 Confrontation and Collaboration between “Liberal” Society and Bureaucracy in the Western Border Regions
3. 学会等名 The 2019 ASEEEES Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimitaka Matsuzato
2. 発表標題 The Orthodox Clergy and the Union of the Russian People in Right-Bank Ukraine in 1905-1914
3. 学会等名 The 2019 ASEEEES Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福島千穂
2. 発表標題 ロシア帝国の「宗教寛容令」(1905年)とカトリック改宗：元合同教会信徒をめぐる競合
3. 学会等名 西洋史読書会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoko Aoshima
2. 発表標題 1905 :
3. 学会等名 ( , , 27 2018 .)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoko Aoshima
2. 発表標題 ... , 1905-1906 :
3. 学会等名 -2018 ( - , , 24 2018 .) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kimitaka Matsuzato
2. 発表標題
3. 学会等名 ( , , 2018.09.10-12) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kimitaka Matsuzato
2. 発表標題 :
3. 学会等名 IV (Nur-Sultan, Kazakhstan, 2019.03.27-28) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Chiho Fukushima
2. 発表標題 Wplywy Ukazu Tolerancyjnego z 1905 na bylych unitow w Krolestwie Polskim
3. 学会等名 Spotkania Polonistyk Trzech Krajow: Chiny, Korea, Japonia (Yongin, South Korea, 2018.11.1)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小森宏美
2. 発表標題 エストニアにおける少数民族政策の変遷：戦間期と冷戦後の比較から
3. 学会等名 ロシア・東欧学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小森宏美
2. 発表標題 From Estonian studies to comparative historical studies: A view of a Japanese scholar
3. 学会等名 Japan and Estonia: Contemporary challenges in humanities and social sciences (Tartu, Estonia, 2018.09.27-28)) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梶さやか
2. 発表標題 19世紀後半のロシア帝国西部諸県 1863 - 64年蜂起の記憶をめぐって
3. 学会等名 ロシア史研究会大会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 青島陽子
2. 発表標題 20世紀初頭における対ポーランド政策：教育政策に見るリベラルと保守
3. 学会等名 ロシア史研究会大会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 青島陽子
2. 発表標題 ロシア帝国のナショナル・イマジネーション
3. 学会等名 第38回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青島陽子
2. 発表標題 ウクライナ戦争の歴史的位相
3. 学会等名 オンライン・シンポジウム「ウクライナ戦争の背景とその波紋：我々は今どこにいるのか」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青島陽子
2. 発表標題 帝政末期における境界地域の再接合 西部境界地域の私学と初等教育における母語教育
3. 学会等名 ロシア史研究会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoko Aoshima
2. 発表標題 Radical Protests at Imperial Schools in the Western Border Regions Around 1905
3. 学会等名 The 10th World Congress of the International Council for Central and East European Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松里公孝
2. 発表標題 ウクライナ史概説 キエフ・ルーシから十月革命まで（露語）
3. 学会等名 中国社会科学院世界史研究所講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松里公孝
2. 発表標題 帝政末期右岸ウクライナの正教司祭とロシア人民同盟 右派ポピュリズムと村政治
3. 学会等名 ロシア史研究会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福島千穂
2. 発表標題 ポーランド国家とルーシ（ルテニア）地域：Gente Ruthenus, natione Polonusをめぐって
3. 学会等名 ロシア史研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計15件

1. 著者名 沼野充義、望月哲男、池田嘉郎、井上まどか、金山浩司、熊野谷葉子、鴻野わか菜、坂庭淳史、楯岡求美、乗松亨平、松里公孝、青島陽子他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 890
3. 書名 ロシア文化事典	

1. 著者名 小松 久男	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 280
3. 書名 1861年 改革と試練の時代	

1. 著者名 .	4. 発行年 2018年
2. 出版社	5. 総ページ数 830
3. 書名 -2018	

1. 著者名 服部 倫卓、原田 義也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 416
3. 書名 ウクライナを知るための65章	

1. 著者名 Mao Yinhui	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Wydawnictwo Naukowe Sub Lupa	5. 総ページ数 532
3. 書名 Spotkania polonistyk trzech krajow: Chiny, Korea, Japonia	

1. 著者名 阪本 秀昭、中澤 敦夫	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 468
3. 書名 ロシア正教古儀式派の歴史と文化	

1. 著者名 櫻井 映子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 404
3. 書名 リトアニアを知るための60章	

1. 著者名 渡辺 克義	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 432
3. 書名 ポーランドの歴史を知るための55章	

1. 著者名 大友展也、松名城弘編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩手大学人文社会科学部国際文化課程欧米言語文化コース	5. 総ページ数 247
3. 書名 欧米言語文化論集IV	

1. 著者名 Szmyt Andrzej, Klimus Elzbieta, eds.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Wydawnictwo Uniwersytetu Warminsko-Mazurskiego w Olsztynie (Olsztyn)	5. 総ページ数 169
3. 書名 Bedziemy wzorem innym, sobie samym chluba	

1. 著者名 中欧・東欧文化事典編集委員会、羽場 久美子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 中欧・東欧文化事典	

1. 著者名 中澤 達哉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 222
3. 書名 王のいる共和政 ジャコパン再考	

1. 著者名 Stefan Berger and Nobuya Hashimoto, eds.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Berghahn	5. 総ページ数 420
3. 書名 Borders in east and west; Transnational and comparative perspectives	

1. 著者名 Yoko Aoshima, ed.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Academic Studies Press	5. 総ページ数 197
3. 書名 Entangled Interactions between Religion and National Consciousness in Central and Eastern Europe	

1. 著者名 Darius Staliunas and Yoko Aoshima, eds.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Central European University Press	5. 総ページ数 400
3. 書名 The Tsar, the Empire, and the Nation: Dilemmas of Nationalization in Russia's Western Borderlands, 1905-1915	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松里 公孝 (Matsuzato Kimitaka)  (20240640)	東京大学・大学院法学政治学研究科(法学部)・教授  (12601)	
研究分担者	小森 宏美 (Komori Hiromi)  (50353454)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授  (32689)	
研究分担者	福島 千穂 (Fukushima Chiho)  (50735850)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授  (12603)	

